

生誕、療養時代 大原文学の芽生え

大正元年(1912)

ふるさと本山での療養生活と創作の日々。
大原文学の芽生え。



「婉という女」第13回野間文芸賞受賞 野間会長より表彰(昭和35年12月)



東京都久留米村の自宅書斎で



林芙美子からの書簡

上京と出逢い 代表作「婉」という女

昭和十六年(1941)

結核と闘いながらも執筆を続け、初期の代表作と言われる
「婉」という女」発表までの苦難の道のり。

上京と出逢い 代表作「婉」という女

昭和十六年(1941)

結核と闘いながらも執筆を続け、初期の代表作と言われる
「婉」という女」発表までの苦難の道のり。



自宅療養中の富枝



吉野村寺家の村道にて
左より富枝(3歳)、母・米(30歳)、姉・雪(7歳)、
異父兄・齋樹(12歳)



吉野第一尋常高等小学校



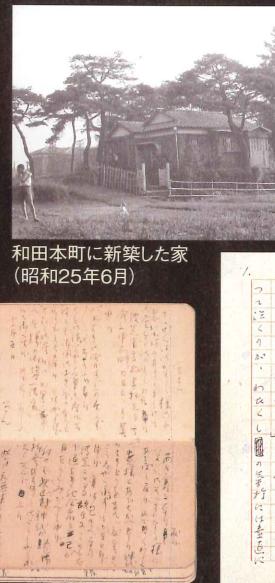
上京するまでの12年間、療養と創作の日々
を過ごした吉野村汗見の家



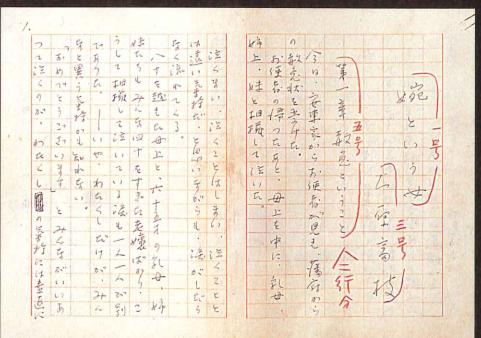
野中婉から谷秦山に送った手紙



和田本町に新築した家
(昭和25年6月)



「ストマイつんばー第七感界の囚人」の出版・
第八回女流文學者會賞受賞祝賀会
(昭和32年6月)



「婉の手帳」野中婉の手紙を
書き写したノート



自宅庭にて(23歳)



雑誌「令女界」に投稿し入賞した
「姉のプレゼント」



昭和13年上半期の芥川賞候補作品
「祝出征」「文藝首都」昭和13年3月号

大原富枝略年譜

大正元年(1912)

九月二十八日、高知県長岡郡吉野村寺家(現・本山町)に生まれる。父・亀次郎、母・米の次女。父は吉野第一尋常小学校校長。四歳年上に姉雪。

大正十年(1922) 十歳
六月一日 母米死去。

この頃から作文の面白さを知り、父の蔵書の古典文学に親しみ始める。

昭和二年(1932) 十五歳
四月、高知県女子師範学校に入学。

昭和五年(1930) 十八歳
六月、師範学校四年生の「学期、物理教室で喀血し入院。退院後、吉野村汗見の自宅で十年近い療養生活に入る。

昭和十一年(1937) 二十五歳
「時雨」はじめ短歌五首が神近市子主宰「婦人文藝」に短編小説水雨が入選。

昭和七年(1941) 二十九歳
一月、自宅療養で小康状態に。初めて投稿した「姉のプレゼント」が「令女界」五月号に入選。

昭和十一年(1943) 三十二歳
「時雨」はじめ短歌五首が神近市子主宰「婦人文藝」に短編小説水雨が入選。

昭和十一年(1944) 三十二歳
二月、空襲しきりの中、新宿区戸塚に転居。四月十三日の空襲で隣家まで焼失するが、奇跡的に焼け残る。八月、同地で終戦を迎える。

昭和二十年(1945) 三十三歳
二月、空襲しきりの中、新宿区戸塚に転居。四月十三日の空襲で隣家まで焼失するが、奇跡的に焼け残る。八月、同地で終戦を迎える。

昭和二十一年(1946) 三十四歳
七月、初の作品集「野中婉の書簡」を新民書房より刊行。「秋砧」婉物語を「新文學」九月、十月合併号に発表。十月、短編集「二番稻」を全国書房より刊行。

昭和二十二年(1947) 三十五歳
一月、敗血症で倒れる。四月、病後の療養を兼ねて都下久留米村東久留米に父と共に転居。

昭和三十年(1955) 四十三歳
六月、杉並区和田本町の新築した家に父と共に転居。以後、住居の本拠は同地を動かず。

昭和三十二年(1957) 四十五歳
二月、「ストマイつんばー第七感界の囚人」により第八回女流文學者會賞を受賞。四月、同書で第十四回毎日出版文化賞を書き綴ぐ。

昭和三十三年(1958) 四十四歳
九月、「ストマイつんばー第七感界の囚人」を「文藝」に発表。

昭和三十五年(1960) 四十八歳
「婉」という女」を群像「二月号に発表。四月には単行本として講談社より刊行。十一月、同書で第十三回野間文芸賞を受賞。

昭和三十六年(1961) 四十九歳
「婉」という女」を「正妻」を講談社より刊行。この年、「女は生きる」を原作としたドラマ「縁」が芸術祭奨励賞を受賞。

昭和三十七年(1962) 五十歳
十月、「川は今も流れ」を講談社より刊行。同題名でテレビドラマ化して放映。

昭和三十八年(1963) 五十歳
三月、高知新聞社主催講演会に上林暁と帰郷。五月、「正妻」を講談社より刊行。この年、「女は生きる」を原作としたドラマ「縁」が芸術祭奨励賞を受賞。

昭和三十九年(1964) 五十一歳
六月、日本文藝家協会代表として中国作家同盟の招待により中国訪問。

昭和四十年(1965) 五十三歳
二月、「おあんさま」を「中央公論」に発表。

九月、日本文藝家協会代表として、ソビエト作家同盟の招待によりソビエト訪問。その後ヨーロッパ各地を巡り、十月末帰国。

昭和四十五年(1970) 五十八歳
五月、「於雪・土佐一條家の崩壊」を中央公論により刊行。同書で第九回女流文學賞を受賞。